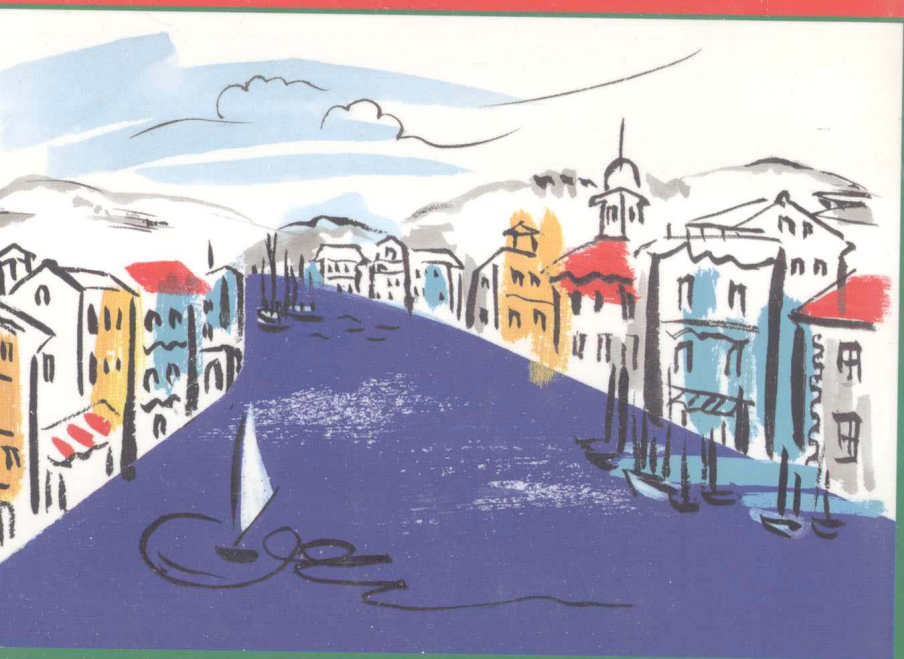


o r t o f i n o

チャオ、ポルトフィーノ!

フランク・シェイファー

羽田詩津子訳



早川書房

トフィノ
チャオ、ポルトフィーノ!

フランク・シェイファー

羽田詩津子訳

工業学院図書館
藏书章



Hayakawa Novels

訳者略歴 お茶の水女子大学英文科卒、
英米文学翻訳家 訳書『大人のための心理
童話』『成熟のための心理童話』アラ
ン・B・チネン、『ダウントOWN』エド
・マクベイン、『幸福を招く男』レジナ
ルド・ヒル、『猫は留守番をする』リリ
アン・J・ブラウン（以上早川書房刊）
他多数

チャオ、ポルトフィーノ！

1997年7月20日 初版印刷
1997年7月31日 初版発行

著 者 フランク・シェイファー

訳 者 ^は羽^た田^し詩^ず津^こ子

発行者 早 川 浩

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 03-3252-3111(大代表)

振替 00160-3-47799

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-15-208093-0 C0097

Printed and bound in Japan

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取りかえいたします。

チャオ、ポルトファイノ！

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1997 Hayakawa Publishing, Inc.

PORTOFINO

by

Frank Schaeffer

Copyright © 1992 by

Frank Schaeffer

All rights reserved including the right
of reproduction in whole or in part in any form.

Translated by

Shizuko Hata

First published 1997 in Japan by

Hayakawa Publishing, Inc.

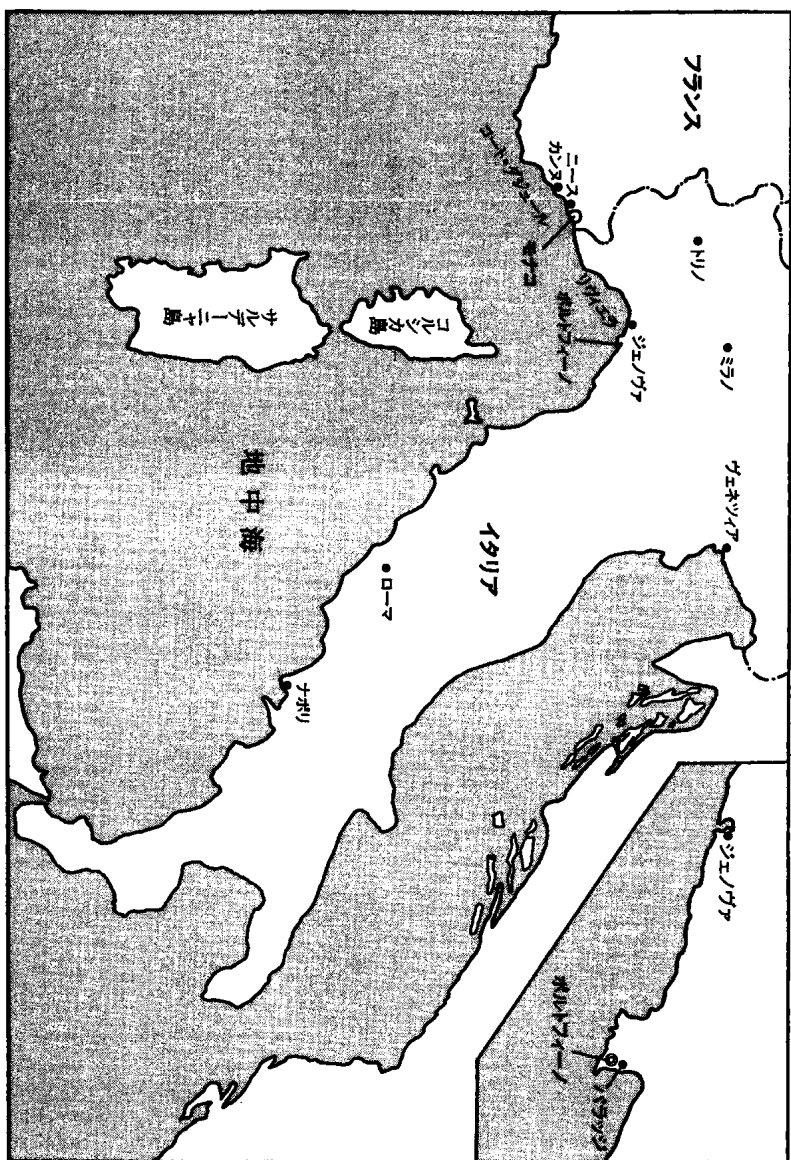
This book is published in Japan by

arrangement with

The Berkley Publishing Group

of The Putnam Berkley Group, Inc.

through Tuttle - Mori Agency, Inc., Tokyo.



妻レジーナに捧げる

一九六二年

夏いちばんに目にする地中海は、いつもトルコ石を思わせた。「ダイヤモンドをちりばめた、トルコ石のプレスレットね」と姉のジャネットはいった。ぼくには二人の姉がいる。気性の激しい十五歳のジャネットと、温和な十三になるレイチェル。

ジャネットは胸の前で両手を組み合わせ、地中海がプレスレットなどと、詩的なせりふをつぶやくのが好きだった。その午後、トルコ石のプレスレットは、鉄道駅の線路沿いに建ち並ぶむさ苦しいアパートに縁どられて輝いていた。海と反対側には、イタリアのジェノヴァ市街が広がっている。ジェノヴァは、サンタ・マルゲリータへの乗換駅だった。

夏の休暇が本当に始まるのは、サンタ・マルゲリータからだ。匂いからして文句なしだった。クチナシの香り、錆びた鉄道線路の金気臭^{かなけ}さ、かすかな小便の匂い。アンモニア臭の強い、鼻の曲がりそうなフランス風の匂いではなく、ほのかなイタリアらしい匂いだ。プラットホームのはずれにある噴水、その横の蔦に覆われた壁でやむなく放尿したことに対する、つつましい謝罪ともいえそうな匂いだった。

ぼくのうちがもっと金持ちなら、駅からパラッジの宿ペンシヨネ・ピエアまで馬車で行っただろう。だが、馬車のかわりにぼくたちは青いディーゼル・バスに乗りこんだ。

母さんはひとつ空いていた席にすわった。姉さんたちとぼくは旅行鞆にまたがった。父さんは立った

ま、後部の窓から外をじっとにらみつけていた。父さんはまだ不機嫌だったのだ。というのも、母さんのせいで、あわやミラノで接続列車に乗り遅れそうになったからだ。これは毎年恒例のことだった。母さんは必ず、とても大切なものを旅行荷物に入れ忘れたことを思い出す。そうすると駅を飛び出していき、通りの向かいの店で必要なものを買うのだ。

毎年毎年、父さんは同じことをいった。「戻ってくる前に列車が来たら、おまえ抜きで出発してしまふからな！」

ぼくたち子供は胸をどきどきさせてすわり、母さんのために祈った。「主イエスよ、どうか母さんが時間までに戻ってこられますように。そして万一遅れても、母さんを駅に残していかないように、どうか父さんの心に語りかけてください」

神は、ぼくたちの願いを聞き届けてくれた。いつも母さんはかろうじて間に合ったのだ。しかし、神の力をもってしても、母さんが家族全員にさんざん気をもませ、父さんの言葉を借りると、「わたしにはどうしても必要な貴重な休暇！」をだいなしにしかけたことを、父さんは許すことはできなかった。

父さんは自分の権利についてうるさい人だった。個人的な不平不満を、人一倍強く感じる質^{たち}だったのだ。母さんが自分の人生をめちやくちやし、胃潰瘍にしようと思んでいる、と思こんでいた。歯痛ですら母さんのせいにした。母さんは世界中のバスの車掌や列車の機関士と結託している、そして、その気になれば旅行の乗り継ぎ便に、ことごとく間に合わなくさせられることを見せつけようとしている、そう信じていた。おまけに、母さんは父さんよりも自分の方に主が味方していることを、見事に証明してみせた。なぜなら、時間がないから、急がないと列車やバスや船に乗り遅れると父さんがいったときに、母さんが長風呂に入ろうが、買い物に行こうが、必ず、ぎりぎり間に合う程度に、バスや列車が遅れたからだ。

時刻表に従えば、確かに時間はなかった。しかし、母さんにとって時刻表は問題ではない。ぼくたち

家族が乗りこめるように、天使たちがバスや列車や船を必ず遅らせてくれたからだ。

バスや列車が遅れるのは常にスイス国内だったから、ぼくたちはこれを奇跡とみなし、それは母さんが父さんよりも敬虔なせいだと思った。なにしろスイスというのは、正確な時刻に固執する連中に治められている、きわめて規則正しい国だったからだ。にもかかわらず、たとえば母さんが脚を剃り終えるまで、もう少し時間が必要だというと、スイスの列車さえ時刻表どおりに走らなくなるのだ！

だから、ぼくたちは神の存在をかたときも疑わなかった。そして父さんは、母さんが列車に乗り遅れるところも、痛い目にあって教訓を学ぶところも、一度たりとも見ることはなかった。神に抗うことはできないのだ。

パラッジでバスを降りると、ぼくはペンショール・ピエアまで先頭になって走り出した。父さんは後ろから叫んだ。「自分じゃ部屋を選べないからな。われわれが着くまで待っていることになるぞ」

たぶん、レイチエルとぼくは、また離れの部屋になるんだろう。離れの部屋に行くには、ペンショールネの本館からいったん出なくてはならなかった。そこはあとから増築された部屋で、専用の階段と出入り口がついていた。シャワーにはまったく勢いがなく、トイレもなかった。部屋は貯水タンクよりも高い位置にあったので、シャワーの栓をひねるとゴボゴボと吸い込むような音を立ててから、ペツとこちらに唾を吐きかけておしまいだった。だが、なぜかビデはちゃんと使えたので、ぼくたちはお尻と足だけは清潔でいられた。それに、夜はビデにおしっこをして水を流すこともできた。あるとき、もうひとつの方、小さいの“ではなく、大きいの”と呼んでいるものをしてみようかと思案したことがあった（小さいの“はおしっこをすることなので、大きいの“は想像がつくと思う）。だが、そっちはビデの配水管を流れていきそうもなかったし、そうなると、お仕置きされるのは目に見えていた。

ぼくたちは聖書を信仰し、聖書の言葉を重んじる根本主義の改革派長老教会の敬虔なクリスチャン一家だったから、ありとあらゆる気恥ずかしいものに婉曲的な名前をつけていた。母さんは姉さんたちに、

今日は「屋根を下りている」日だから泳げない、とこそそそさやいた。母さんは、およそ考えうるすべてのものを——たとえばセックスでも卵巣でも子宮でも——道徳的教訓が当たり障りのない存在、いわばヴィクトリア朝時代のラヴェンダーの香りがついた色褪せた絵葉書のように、人畜無害なものにしてしまった。ようするに、さまざまな語句の完璧なパラレル・ワールドを持っていたのだ。「わたしは今日、屋根を下りているのよ」「あの人は女性的問題を抱えている」「大きいのと小さいのと両方すませたの?」「あなたの小さなものがひりひりするの?」「小さなものを清潔に保つためには、神様がお創りになった、保護のための皮膚の下も洗わなくてはだめですよ」

ぼくの「小さなもの」は「聞き分けが悪い」とき、上向きになった。それは母さんにいわせると、「あなたがクリスマス——結婚——に包みを開くときまで大切にとっておかなくてはならない、神様の美しい贈り物」のひとつだった。

だが、これは一九六二年のことだ。ぼくの「小さなもの」はまだ脳とつながっていなかったで、これといった理由もなく、頭をむくむくともたげたり、しょぼんとうなだれたりした。ぼくは十歳だった。聖書を信仰する根本主義の改革派プロテスタントがローマ・カトリックのイタリアで休暇を過ごす、周囲の不信心者たちは、真理を見せつけられることになった。

たとえば夜の食事の席で、ペンション・ネ・ビエアの他の泊まり客が、一人残らず前^{フレンチバスト} 菜を給仕されているとき、ぼくたち家族だけは、母さんが食前の祈りを捧げるのを聞きながらまだ頭を垂れていた。

母さんが祈っているとき、ぼくたちは実際には「われわれの心のうちにある光、すなわち主イエスの証人となった」のである。母さんは宿でも家と同じぐらい長々と祈った。ぼくが三切れのマグロ、三切れのサラミ、四つのオリヴ、大きくて太いポローニャ・ソーセージを見つめているあいだ、母さんはひたすら祈り続けた。隣のテーブルにすわっている十歳のイギリス人少女、ジュニファア・バズリントンがこつちを観察しているかどうか気にするまいとして、ぼくは必死にうつむいていたが、ジュニファア

が見ていることはわかっていた。それは屈辱だった。自分たちは「無軌道な異教徒の中で世の光となるために召された」のだと承知していても、ぼくたち一家がとても変わっていると考えるのは辛かった。ぼくはポローニャ・ソーセージの中に入っている、緑色のピスタチオの数を勘定した。全部で五粒あった。三枚のサラミの中の黒胡椒の粒を数えた。一枚にはふたつ、別の一枚には三粒、最後の一枚には半粒しか入っていないかった。

「天にまします父よ、わたしたちの休暇のための資金をお与えくださったことを、謹んでお礼申し上げます」——オリヴのオイルが滴り落ちて皿に溜まりはじめた——「……そして、主の尊い御前みまへにて、今日という日に崇拜と感謝を捧げます」

隅のテーブルには、りっぱなローマ・カトリックのイタリア人家族がいた。ぼくはその一家がなんと目を開けたままお祈りを唱え、十字を切るのを見た。父親は食べ物の前にして何かつぶやいたが、ひとことだけだった。そのことで恥はづれ入っている様子はなかった。でも、ぼくたちのお祈りは長くあらねばならなかった。ともしびを升きざの下に置くがごとく、善行を隠さないようにするために。また天国に行ったときに自分たちが主を恥じていたことを悟り、そのため、ぼくたちが主を人々の前で否いなんだから、主もぼくたちを父なる神の前で否むと、いわれないために。

「主よ、わたしたちはキリストの御名みなを崇め奉ります。どうか、わたしたちの弱さを、主の強さで、まったきものにしてくださるようお願いいたします」

マリネしたオリヴのくすんだ緑がかかったオイルが、ポローニャ・ソーセージの端に染みこみかけている。そろそろ、最悪のできごとが降りかかってこようとしていた。だから、ぼくも一心に祈った。

心の中でぼくはこういったのだ。「お願いです、どうかどうかお願いです、母さんが祈っているあいだにルクレツィアがテーブルにやって来て、食事といっしょにワインはいかがですか、と聞きませんように」

ルクレッシアは宿の主人の娘だった。ルクレッシアも母親も、部屋を掃除するときは普段着の上にブルーのゆったりした部屋着をはおった。夜はルクレッシアが給仕係をつとめた。このときは、黒のプリースカートに白いエプロンをつけた。ルクレッシアの糊のきいたエプロンのひもは、スカートのうしろの裾まで垂れていた。ディナーを給仕するときは、白いブラウスの胸元に銀の十字架をぶらさげている。それがいかにもローマ・カトリック教徒らしく見えた。

ルクレッシアはぼくたちのテーブルのわきに立った。「^{ヴィーノ}ワインはどうします？　赤？　白？」ルクレッシアがたずねた。

「主よ、お願いします！」ぼくは祈った。

母さんはそのまま祈り続けていた。

「ヴィーノは？」

ルクレッシアには、ぼくたちが祈っているのがわからないだろうか？　母さんは祈りを中断して、顔を上げてくれるだろうか？

「この食べ物を与えてくださったことに感謝をします。どうか、この宿に暮らし働いている人々が、主が自分たちの救い主であることを悟りますように……」

「ヴィーノは？」

母さんは目を開けて無念そうに顔を上げると、まばたきして光に目を慣らしてから、ルクレッシアにいたましげに微笑みかけた。気の毒な娘、主を知らないなんて。事実、ぼくたちが祈っているというのに、ルクレッシアは終わるまで待とうとしなかった。たぶん、祈っていることに気づかなかったのだろう。母さんが目をつぶってひとりごとをいっているあいだ、ぼくたちはただ料理を見つめていると思う。にちがいない。ぼくたちはルクレッシアと、すべての救われないイタリア人たちに哀れみを覚えた。ローマ・カトリック教徒は自分たちが主を知っていると考えているが、実はイエスではなく、マリアを

信仰している。つまり、連中は父なる神を自分たちの救い主と信じているのではなく、善行によって救いを手に入れようとしているのだ。彼らは迷える人々だった。とはいえ、そういう連中の前で祈らずにすめばいいのに、とぼくは思った。

「ヴィーノ？」ルクレツィアは何が起きているのだろう、とそろそろ不審に思いはじめ、英語を試すことにした。「ワインは？ 赤……白……いかが？」にっこりした。母さんも笑い返した。その微笑には憐憫がたっぷりこめられていた。

「いいえ、ルクレツィア、けっこうよ。わたしたちは一切のアルコール類を口にしませんから」

「ワイン、いらない」

「ええ、けっこうです、わたしたちはクリスチャンですから。お水だけでいいわ」

「^{アクア・ミネラル}・ウォーター？」

「いえ、ただの水……アクア・ナトゥラーレ」

今度はルクレツィアが哀れむようなまなざしになり、気の毒そうな微笑を浮かべた。母さんはその笑みを、真理を知りたがっている渴望の現われと解釈した。だがぼくは、夕食に生ぬるい水道水を飲む連中を気の毒がっているだけだ、と知っていた。なにしろワインといっても、百五十リラ出せば、キアンティかオルヴィエートがひとびん買えるのだから。

ルクレツィアが立ち去ると、ぼくたち一家は頭を垂れて、邪魔されたお祈りをしめくくった。「そして、主よ、かわいそうなルクレツィアのために祈りを捧げます。あの娘とあなたの愛を分かち合う機会を、そして、あの娘に神を証^{あかし}する機会を、どうか、わたしたちの一人にお与えくださいますように。キリストの御名によって祈ります。アーメン」

一匹の蠅が、ぼくの皿のオイルに仰向けに落ちてもがいていた。蠅は脚をばたつかせ、翅^{しやう}脈^{みく}の模様を厚手の白のディナー皿になすりつけた。

ジェニファーは、やはり思ったとおり、ぼくたちのテーブルを目を丸くして見つめていた。それから母親に何かささやくと、クスクス笑った。